

「フィリピン派遣参加報告書」

京都大学文学部4年 (氏名) 飯塚 彩

主にフィリピンにルーツを持つ児童・生徒に対する学習支援と、その母親(結婚移民)を含めた社会統合に関する理解を深める授業の一環として、一週間フィリピンに滞在した。フィリピン政府在外フィリピン人委員会(CFO)に研修プログラムを用意していただき、その内外において、政府機関、NGO、教育機関、その他施設や観光名所などで見学とインタビューを行った。

私は、今回学びたいこととして、①そもそもなぜ海外(日本)なのか、②渡航・移住に際してどのような問題やギャップが起こるのか、そして③今の山積みの問題は「個々に対応していくべき問題」と「社会から変えていくべき問題」との間にどう線引きをするべきか、という主に3点を意識してこの研修に臨んだ。

①に関しては想像していた通り、日本人男性との恋愛と、金銭的な事情(中でも日本を選ぶ理由は文化面での親和性など)が主な理由であった。しかし、フィリピンが国を挙げて国民の海外での労働とフィリピンへの送金を促進していることが、日本(日本であればそれは「労働力の流出」と呼ばれるであろう)に住む私にとっては衝撃的だった。

また、今回の研修を通して最もリアルで内面的な事情を知ることができたと感じるのが、②に関することである。JFCの経済的自立や日本への渡航をバックアップする団体であるBATIS CenterやDAWNを訪問したり、CFOでの移民手続きを完了し渡航をひかえた結婚移民の方々のお話を聞いたりする中で、彼らが抱えている(あるいは抱えるであろう)問題は、簡単に本人や周りの人々が「何が正しく何が正しくないか」をジャッジすることのできない難しさを含んでいることを思い知らされた。中でも最も印象に残ったのは、BATIS Centerで伺った話である。父親と離れ離れになった在フィリピンJFC達にとって、日本の父親となんとか対面するというそのものが“fulfilling their identities”、つまり自己実現のための手段である場合があるという。しかしその一方で、実質的に自分と母親を捨てた存在である父親を許せず、憎み続ける子供達も存在するという。私達京都大学の学生は皆後者に共感していたが、念願の父親との対面を果たし涙するJFC、そしてその上でも「自分の子供だと認めることは出来ない」と様々な事情から拒否されてしまうケース等を知り、理不尽で、簡単に救うことの出来ない彼らの境遇をどうして行けば良いか分からず苦しくなった。また、日本に働きに出たけれど日本の職場の慣習に馴染めず苦勞をしたフィリピンの人々や、現段階で言葉がほとんど通じないことを気に留めず日本人男性との日本での夫婦生活に胸を膨らませる女性等に対しても、どのようなアドバイスを渡すべきか、あるいは何も言わないことが吉なのかということで研修全体を通して悩み続けた。

そして、③に関して、私がこの研修およびこれまでの学習支援活動を通して「社会から変えていくべき問題」として唯一はっきりと認識したことが、語学力の問題である。日本で生活する上で日本語能力があらゆるものの障壁になっていること、何かしらの受け皿がある子供達よりもその母親達や労働者達の方が深刻であり根本的な解決策が必要であること、等の意見が先生と学生との間で出た。しかし、語学支援は社会の問題であるということ以外、私は③に関して他の線引きを見つけることは出来なかった。前述の通り、簡単に周りの人が「正しいこと」をジャッジすることは出来ず、個人と周りの環境に委ねた方が良いことが私の想像以上に存在していたからである。私は日系人や技能実習生を工場に多く抱えるメーカーへの就職が決まっており、その会社から今の問題を変えていくことは出来ないだろうかと思ひ、このような議題に興味を持っていたが、今後もこの分野の知識に敏感であり続け、様々な角度から考えていきたいと改めて感じた。

研修を通して身をもって知った問題はこれら3点には収まらず、フィリピンの貧困の問題、自動車台数が急激に増えて破綻した交通ルールの問題、歴史上の出来事(マニラ市街戦など)に対する加害者と被害者の意識の差の問題等、初めて知ること・初めて考えることが多くあった。また、「フィリピン人は明るい」というイメージを持たれる彼らはただ「明るい」のではなく、「初めて会う人にも興味を持って接する」というとても素敵な人間性を持っているのだと知った。フィリピンに関する社会問題を「どうにかしたい」と率直に感じたこと、しかし彼らの人柄が私達の時間を楽しいものにしてくれたということ、そしてそのようなことをメンバーで気持ちを共有しあいたくさん話したこと忘れず移民問題について考え続けていきたいし、折に触れこの経験を様々な人に話していきたいと思った。